

ウォーターハウス《オルフェウスの首を見つけたニンフたち》(1900年)  
——世紀転換期の象徴主義とその国際性の視点から——

伊藤 ちひろ (関西学院大学大学院)

後期ヴィクトリア朝の画家J・W・ウォーターハウス(1849-1917)は、主にラファエル前派につながる画家とみなされてきた。たとえば、ミレイの《オフィーリア》(1851-52年)が彼に大きな影響を与えたことは多くの研究者が認めている。しかしその一方で、アカデミーでの活動に積極的だったこの画家を彼らの後継者に数えることへの疑問も呈されている。このように、ウォーターハウスの美術史上の位置付けは再検討の途上にある。その過程でトリッピは彼の特質を、印象派や象徴主義といった大陸の芸術的感性をラファエル前派に持ち込んだ点に見出した。しかしその点についてはこれまで十分に検討されていない。本発表の目的は彼の作品が示す象徴主義的側面とその国際性に注目することで、そこに新たな歴史的意味を見出すことにある。

ウォーターハウスは1901年に《オルフェウスの首を見つけたニンフたち》(以下《オルフェウス》)を発表した。オルフェウスの物語は当時人気のあった主題のひとつで、レイトン(1864年)やワッツ(1869年ほか)も取り上げている。彼らをはじめヴィクトリア朝の画家たちは、主にオルフェウスが冥界からエウリュディケを連れ帰る場面を描いた。しかしウォーターハウスはそれに倣わず、オルフェウスの死後の場面を選んでいる。この選択には、モローの《オルフェウス》(1865年)からの影響が指摘されている。この作品は1900年の『マガジン・オブ・アート』誌に掲載されており、彼が目にした可能性が高い。さらに水に浮かぶ頭部と豎琴の描写は、デルヴイルの《オルフェウスの死》(1891年)との強い類似性を示している。このようにウォーターハウスの《オルフェウス》には、ヴィクトリア朝絵画の枠内では説明し尽くせない要素がある。

またオルフェウスの頭部と豎琴に花が添えられる描写は『変身物語』などにも遡ることのできないもので、ウォーターハウスの特徴をよく表している。すでにメンコフが示唆しているように、ウォーターハウスを含むヴィクトリア朝の画家たちは当時流行した花言葉から着想を得て、花の表現に象徴的な意味をもたせてきた。本発表ではこれらの指摘をもとに、オルフェウスの頭部と豎琴に添えられた花の描写に新たに注目して、その意味の解釈を試みる。またここでは、ウォーターハウスが注目し続けたモチーフのひとつである水の表現にも注目する。水は《オデュッセウスとセイレーン》(1891年)など神話を題材にした作品でも多く描かれ、死の主題と結びつけられてきた。本発表では、彼がオルフェウスの死後の場面を選んだ背景にあるこうした主題への関心についても、その可能性を検討する。そして以上の考察を通じて、《オルフェウス》がヴィクトリア朝の象徴主義と大陸の象徴主義の融合により、同時代のイギリス絵画に国際的な広がりを持ち込んだ作品であることを結論として明らかにする。